

社会における共同体性の根本原理としての「同感」

—アダム・スミス『道徳感情論』の記述から—

荒井 眞一* 青木 香保里

1. はじめに

本稿の目的は、教職課程における授業内容の在り方について様々な文献記述の検討・考察をとおして理解を深め、それらの理解を実際の講義の有効な基礎とすることにある。

平成 30 年度から 31 年度にかけて、教職課程を設置するすべての大学に対して、この課程についての再課程認定が文部科学省によって行われた。この課程認定においては、かつての「教職に関する科目」に対してコアカリキュラムというものが文部科学省より示され¹⁾、その結果教職課程における最低基準ともいべき内容の順守が図られることとなった。すなわち、この実施により全国共通の教育内容が示されることとなったわけである。

文部科学省初等中等教育局教職員課作成による『教職課程認定申請の手引き（教員の免許状授与の所要資格を得させるための大学の課程認定申請の手引き）（平成 31 年度開設用）【再課程認定】』によれば、大学関係者に対しては、以下のような要望が示された²⁾。

教職課程の担当教員一人一人が担当科目のシラバスを作成する際や授業等を実施する際に、学生が当該事項に関するコアカリキュラムの「全体目標」「一般目標」「到達目標」の内容を習得できるよう授業を設計・実施し、大学として責任をもって単位認定を行うこと。

本稿においては、再課程認定前後で「教育の基礎的理解に関する科目」との枠組みに含まれている教職科目のうち、「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」を意識した検討・考察を行う。この科目は、多くの大学では「教育原理」あるいは「教育原論」との科目名で呼ばれる科目である。文部科学省によれば、この科目に関するコアカリキュラムでは、「全体目標」の冒頭部において「教育の基本的概念は何か」と定められ、続く「(1) 教育の基本的概念」の「一般目標」では「教育の基本的概念を身に付けるとともに、教育を成り立たせる諸要因とそれら相互の関係を理解する」ことが述べられたのち、「到達目標」の 2 つめに以下の記述がなされている³⁾。

*札幌学院大学

- 2) 子供・教員・家庭・学校など教育を成り立たせる要素とそれらの相互関係を理解している。

本稿では、上記「教育を成り立たせる要素」として社会における共同体性を考察の対象としたい。この考察を行うためのキーワードとして本稿では sympathy という言語の邦訳である「共感」または「同感」という語を中心に据えたいと考えている。詳しくは次章以下で述べるが、この後はホッブズ以来の社会契約説において重要な位置を示す語として用いられ、ルソーなどを経てアダム・スミスによって新たな意味合いを付加され、社会科学の始まりに関わる語となっている。内田義彦によれば「人間の学である道徳哲学の伝統」のなかから「道徳哲学の一部であると同時に社会科学である経済学は生まれてきた」という⁴⁾。それゆえアダム・スミスによる「人間の学である道徳哲学」について考察することによって、「教育を成り立たせる要素」の基礎を形成する部分に迫ることが可能となると考える。

2. アダム・スミス理論における「同感」の位置づけ

内田によれば、「経済学の父」と称されるアダム・スミスが、前章末で述べた社会科学としての経済学を形作った経緯は以下のようにまとめられる⁵⁾。

人間の学を有効に作りあげるため、経済に関心をもち、さらに経済政策の学の流れの中にあつた経済学ともとりくんで、社会科学である経済学を、(中略)、作った

上記「人間の学」から「経済学」を作り上げる過程において、スミスが著した著作は『道徳感情論』と『国富論』の 2 冊にすぎない。大家にして 2 冊の著作という事実とこの 2 冊にしてこれほどの影響力という 2 点において驚きを禁じ得ないが、内田によれば上記 2 冊はスミスによる以下の「2 つの方法」に対応しているようである⁶⁾。

その 1 つは、一定の機構におかれたときに、人間はどう行動するだろうかを、自分にひきつけて理解する方法、(中略)、いま 1 つは、個々人の行動が織り成されて、意図されざる結果を作り上げる過程なり、結果なりを知ること

内田によれば、「個々人の行為を無視しては、社会体の現象を説明すること」は不可能である。そしてまた、「社会の機構が違つと、個々人の行為が違つてくる」こともまた確かなことである。内田によれば、このような認識をふまえてスミスは「2 つの方法」を以下

のように具体化したという⁷⁾。

その(「個々人の行為」が一筆者)違ってくるゆえんをスミスは共感の手法によって押さえながら、政治の制度如何による個々人の行為の違いが、結果として「社会的分業の構造」に及ぼす影響を分析の手法によって検出する。(以後の引用も含めて傍点はすべて原文による一筆者)

同様な記述は内田による初期の論考においても、以下のような記述によって示される⁸⁾。

一方で原動力たる人間を同感⁹⁾の原理をもっておいかけ、他方、その客観的結果のちがいを生産力機構の観点から客観的に分析する。

上の記述を言い換えるならば、「あるべき自然の法を、内からと外からと両方からおしてゆこうというやり方」となる¹⁰⁾。すなわち、「同感の原理」によって「内から」、そして「客観的に分析する」ことによって「外から」考察する。この考察により、互いに影響を与えあう「社会の機構」と「個々人の行為」の、双方を把握しようということが、アダム・スミスによって試みられたといえる。

「同感の原理」によって「一定の機構」におかれた「個々人の行為」を考察することで「あるべき自然の法」を導き出すことがスミスによる試みの一端にあると理解されるだろう。学校という社会の一翼を担う集団における共同体性の発揮のされ方について学ぶ際の基礎的な考察の枠組みが、スミスによる「同感の原理」の検討から導かれるのではないか。

3. 『道徳感情論』における「共同体性」の具体例としての「同感」

3.1 「同感」の「固有で始原的な意味」

『道徳感情論』によれば、「哀れみまたは同情」は「われわれが、他の人びとの悲惨を見るか、たいへんいきいきとしたやり方でそれを考えさせられるかするとき、それにたいして感じる情動(エモーション)である」という¹¹⁾。そして、このような「情動」にかんして、「われわれが、(中略)、なにかの概念を形成しうるのは、想像力だけによるのである」という¹²⁾。「哀れみまたは同情」が「想像力だけ」から生ずるといふのであれば、このような「想像力」が十分に働きうるような状態にならなければ、「哀れみまたは同情」もまた、(それを見る人に)十分に伝えられることはないだろう。『道徳感情論』における以下の記述には、このような「想像力」が十分に働きうるための条件が、述べられている¹³⁾。

人間の心がうけいれるどんな概念においても、傍観者の情動はつねに、かれがその事情をはっきりと感ずることによって、受難者の諸感情はこうであるはずだと想像するところに、対応する。

すなわち、「事情をはっきりと感ずること」が、「哀れみまたは同情」にかんして「なにかの概念を形成」するにあたっては不可欠といえるのであろう。それゆえに、『道徳感情論』においては、以下のような、1つの結論が導き出される¹⁴⁾。

同感、その情念を見ることからよりも、それをかきたてる境遇を見ることから、おこるのである。

すなわち、「境遇を見ること」によって、「なにかの概念」としての「同感」が形成されるといえるのだらう。本稿の対象とする学校教育に引き寄せて考えるならば、伝えるべき事柄を支える「境遇」が内容としてとり入れられることによって「なにかの概念」の形成が可能となるのではないか。

ただし、『道徳感情論』によれば、「哀れみまたは同情」といった「受難にたいするわれわれの同胞感情をあらわす」ことばは、「同感」という語の「もっとも固有で始原的な意味」をあらわすに過ぎないという¹⁵⁾。伊藤宏之によれば、「スミスでは他人の悲しみなどの不幸な情感に対する同類感情のみでなくすべての種類の情緒に対するそれである」という¹⁶⁾。それゆえ、『道徳感情論』において述べられる「同感」という語の理解のためには、「他人の悲しみなどの不幸な情感」以外の「同胞感情」にかんする考察が必要となるであらう。

水田洋訳『道徳感情論』に「共感」の語を見つけることはできないが、水田洋訳『リヴァイアサン』においては、「compassion」の日本語訳として「共感」が用いられている¹⁷⁾。原文もあわせて引用すれば、以下のようなものである¹⁸⁾。

〈あわれみ〉他人の災難にたいする悲しみは、あわれみであり、同様な災難が自分の身にもふりかかるかもしれないということの構想から生じる。それ故、それは**共感**とも呼ばれ、現今の言いかたでは**同情**と呼ばれる。

Grief, for the Calamity of another, is **Pitty**; and ariseth from the imagination that the like calamity may befall himselfe; And therefore is called also **Compassion**, and in the phrase of this present time a **Fellow-feeling**:

(上記引用における傍点・斜自体・太字等は、すべて原文に従ったものである—筆者)

『道徳感情論』で用いられている「哀れみまたは同情」という語が、同じ翻訳者の下で『リヴァイアサン』においても使われている。両著作の原著の発刊は、『道徳感情論』が 1790 年で、『リヴァイアサン』が 1651 年である。両者に 100 年以上の開きがあることを考えるならば、『道徳感情論』に示された「同感」という語の「もっとも固有で始原的な意味」としての「哀れみまたは同情」は、『リヴァイアサン』に述べられたものと同じ意味を持つと思われる。

3.2 「相互的同感」の独自性

『道徳感情論』(第一部・第二篇—筆者) 第一章 相互的同感の喜びについて」の冒頭においては、以下のような記述がなされている¹⁹⁾。

同感の原因がなんであろうとも、または、それがどれほどかきたてられようとも、われわれの胸のすべての情動について、他の人びとのなかに同胞感情を観察すること以上にわれわれを喜ばせるものはない。

『道徳感情論』においては、上のような「他の人びとのなかに同胞感情を観察すること」の例として、以下のような記述がなされている²⁰⁾。

われわれが、ひとつの本や詩をたびたび読んだために、自分だけでそれを読むことには、もはやなんの楽しみも見出しえないときに、われわれはなお、それを仲間にたいて読むことに、喜びを感じるるのである。

仲間の全員が 1 つの事をおこなうときの楽しさといった事柄が、上の記述に対応するのであろう。このような事柄を「相互的同感」と呼ぶことが可能であるならば、「同感」という語のもつ意味は、歴史教育の考察を行なうにあたってとても大きいものといえるのではないか。上の例に示されるように、「かれ(主要当事者—筆者)の楽しみへの同感によって楽しませ」ることによって「かれの楽しみが、われわれ(観察者—筆者)自身のそれを活気づける」ことが可能となる²¹⁾。上と同様な内容の提示が教育実践において可能となるならば、例えば歴史上のさまざまな人物としての「かれ」の「楽しみへの同感」によって、学習者としての「われわれ」の楽しみもまた、活気づけられるであろう。内田もまた「スミスが言う同感には、(中略)、同感しうる本能の他に、他人の同感を得たいという本能が含まれております」との同様な指摘を行っている²²⁾。

ただし、上のような「相互的同感」を考察するにあたって、前節に述べられた「もっ

とも固有で始原的な意味」における「同感」を考察する際と同様な以下のような注意点が指摘されている²³⁾。

かれは、かれの仲間(相手)のあらゆる事情を、そのもつともこまかい附随物のすべてとともに、とりいれなければならないし、かれの同感の基礎である想像上の境遇の交換を、できるだけ完全なものとするように、努力しなければならない。

すなわち、「相互的同感」においても、「同感の基礎である想像上の境遇」にたいする理解は、不可欠であることになる。

3.3 「歓喜」にたいする「同感」の有用性

『道徳感情論』第一部・第四篇・第一章においては、「歓喜にたいするわれわれの同感」について²⁴⁾—「わたくしがあえて主張したいのは、つぎのことである」との記述に続き—以下のような記述がなされている²⁵⁾。

歓喜に同感するわれわれの性向は、悲哀に同感するわれわれの性向よりも、はるかに強いということ、そして、快適な情動にたいするわれわれの同胞感情は、苦痛な情動にたいしてわれわれが抱くものよりも、主要当事者によって当然に感じられる情動のなまなましさに、はるかに近づく、ということである。

「歓喜に同感するわれわれの性向」が「主要当事者」によって感じられる「情動のなまなましき」にはるかに近づく理由は、以下の言によって示される²⁶⁾。

観察者は、かれの歓喜にすっかりはいりこむよりも、かれの悲哀にまったく同感して完全に歩調を合わせるほうが、はるかに困難だと感じるにちがいないし、一方のばあいには比べて他方のばあいには、かれ自身の自然で通常の状態の調子から、はるかに遠ざかっているにちがいない。

例をあげて考察したい。神経にできた腫瘍を取り去る手術をした人物がいたとする。この手術の経過を誰かに説明する場合を想像してみたい。この経過説明を聞く人にとっては、“麻酔が十分に効かない腫瘍部分にメスが当たるときのびりびりとしびれるような痛み(に耐えるときの悲痛な気持ち)”との説明よりも、“取り去った腫瘍が良性であったと聞かされたときのほっとした気持ち”との説明のほうが、手術を受けた人物の心情を、より正確

に感じ取ることが可能であるということだろう。確かに、同様な手術を経験したことの無い人物にとっては、手術台に乗せられた人物の追い詰められた心境は「かれ自身の自然で通常の状態の調子から、はるかに遠ざかっている」といえるであろう(「同感」という個別的感情についての考察を深めるために、あえて個人的な経験を述べた一筆者)。

『道徳感情論』においては、上に述べられたような、「歓喜にたいするわれわれの同感」こそが「真の同感」であり、「喜びをともにすることが人間本性の一原理である」と述べられている²⁷⁾。この指摘は忘れられるべきではないだろう。『道徳感情論』に従う形で「歓喜にたいするわれわれの同感」を叙述するならば、「人間本性の一原理」を叙述することが可能となるからである。

教育学者による一節を引用したい。北海道大学教育学研究科教育方法研究室代表だった須田勝彦は、自身の論稿の中で上記『道徳感情論』に通ずると思われる以下の記述によって人間の道徳性の根源となる事柄について論じている²⁸⁾。

自分の活動が他の人のよろこびとなることを自らのよろこびとする。他の人の活動が自分のよろこびとなることが他の人のよろこびとなる。このような情動、目的意識が共同体を維持・発展させる原動力であり、この原理自体はいつの時代にあっても不変である

須田によれば、人間の道徳性は「共同体の維持・発展」にその根拠を持っており、「古くからさまざまな言葉で語られてきている」という²⁹⁾。「人間本性の一原理」から「社会の機構」への考察を試みたアダム・スミスの論は、「さまざまな言葉」の 1 つとして、検討する価値を有するものであると考えられるのではないか。

4. 「同感」の複合的發展から導かれる共同体性の根本原理

『道徳感情論』によれば「貧乏な人は、(中略)、かれの貧困を恥じる」という。この理由として、以下のような記述がなされている³⁰⁾。

かれはそれ(貧困一筆者)が自分を、人類の視野のそとにおくこと、あるいは、もしかれらがいくらかかれに注意したとしても、しかしながらかれらが、かれが耐えしのんでいる悲惨と困苦について、いくらかでも同胞感情をもつことはめったにないということを、感じている。

上の記述とは逆に、「身分があり卓越した人は、世間全体から、見守られる」という。この「見守られる」理由として、以下のような記述がなされている³¹⁾。

あらゆる人がかれを見ることを渴望し、かれのおかれた状況がとうぜんにかれのなかにふきこむ、あの歓喜と勝ち誇りとを、少なくとも同感によって、心にえがくことを渴望する。

身分があり卓越した人に与えられるであろう、歓喜と勝ち誇りを心にえがくことを渴望するのであるから、この渴望の内容は、地位の上昇や境遇の改善であろう。これら地位の上昇や境遇の改善によって、いつかは（渴望の当事者自身も）世間全体からの「同感」を獲得したいと願う。すなわち、「同感」に上記「渴望」の起点があるといえるのではないか。

内田によれば「同感しうる本能と同感獲得本能とはいずれも社会をなして生存する個体としての人間の本能としてスミスが社会理論の基礎にすえたものです」という³²⁾。この指摘から、「相互的同感」と、「相互的同感」を起点とする「同感獲得本能」の重要性が理解される。

上記「同感しうる本能と同感獲得本能」が「社会理論の基礎」に据えられるものであるならば、このスミスによる考えを自身の問題に当てはめて考察することが可能となるのではないか。学校に限らず集団生活を営む者のほぼすべての人に“他人から良く見られたい”という気持ちがあることは否定されないだろう。本章における上記説明を当てはめることにより、このような虚栄心とでも呼ぶべき人間の道徳的な感情は説明が可能となるように思われる。

教職課程講義「教育原理」において筆者は、上記説明に該当する例を一自身の経験に基づいて一挙げることを履修学生に求めた。アダム・スミスという歴史的な大家の著作ゆえに“恐れ多さ”を感じずる学生も少なくはなかったようであったが、複数回の授業の中で「同感」にかんする考察を求める内容の一課題提出を繰り返すことにより少しずつ理解が得られたように感じている。このような課題に対して、密なコメントを返すことが求められる遠隔授業は有効な働きをなすように感じられた。

今後の課題は、本稿で述べた理論的内容を踏まえた講義に対する学生たちの理解のあり様または理解へといたる筋道にかんして、学生による記述を活用しながら検討を重ね実際の講義をより有益なものとすることである。

註

- 1) 文部科学省初等中等教育局教職員課『教職課程認定申請の手引き（教員の免許状授与の所要資格を得させるための大学の課程認定申請の手引き）（平成 31 年度開設用）【再課程認定】』2017 p.122-153
- 2) 文部科学省初等中等教育局教職員課前掲書 1) p.124
- 3) 文部科学省初等中等教育局教職員課前掲書 1) p.127
- 4) 内田義彦『作品としての社会科学』1981（所収『内田義彦著作集 第 8 巻』岩波書店 1989）p.69
- 5) 内田前掲書 4) p.68
- 6) 内田義彦『社会認識の歩み』1971（所収『内田義彦著作集 第 4 巻』岩波書店 1988）p.144
- 7) 内田前掲書 6) p.147
- 8) 内田義彦「スミス『国富論』」1957・5（所収『内田義彦著作集 第 4 巻』岩波書店 1988）p.202
- 9) 『道徳感情論』（水田洋訳 筑摩書房 1973）においては、「共感」との語は見られない。同書においては、この「共感」とほぼ同じ意味をあらわすと思われる語として、「同感(sympathy あるいは sympathize)」との語が用いられている。これら「共感」および「同感」という両者の関係にかんして、内田義彦文献について見るならば、前掲書 6) では『道徳感情論』（水田洋訳）における「同感」との語が「共感」として論がなされている一方で、前掲書 4) では「同感」との言により論が展開されている。前掲書 4) によれば、「スミスでは(sympathy に相当する日本語は一筆者)共感でいい場合もありますが、同感でないともざい場合も多くて、訳語に困るところです」(p.118) という。前掲書 4) および上記その他の記述から察するに、「共感」および「同感」という両者は、「訳語」の問題として生じたものと考えられる。それゆえ、本稿においては、上記両者は「sympathy」という同一の英語を示すものとして、以下の考察を進めるつもりである。混乱を避けるために、「共感」および「同感」の表現は、(考察の対象とする)それぞれの文献ごとに同じ表現を用いるが、(筆者個人の見解を述べるにあたっては、『道徳感情論』（水田洋訳）を尊重し「同感」との表現を用いることとするつもりである。
- 10) 内田前掲書 8) p.203
- 11) アダム・スミス『道徳感情論』水田洋訳 筑摩書房 1973 p.5
- 12) スミス前掲書 11) p.6
- 13) スミス前掲書 11) p.8
- 14) スミス前掲書 11) p.10
- 15) スミス前掲書 11) p.62
- 16) 伊藤宏之『「共感」のとらえ方と社会科学の方法』（所収 大槻健・臼井嘉一編『中学校社会科の新展開』あゆみ出版 1983）p.194
- 17) ホップズ『リヴァイアサン』（水田洋 田中浩訳 河出書房新社 1966）p.43
- 18) Thomas Hobbes『Leviathan』（1651 J. M. Dent & Sons Ltd 1914）p.9
- 19) スミス前掲書 11) p.14
- 20) スミス前掲書 11) p.15
- 21) スミス前掲書 11) p.15
- 22) 内田前掲書 4) p.111

- 23) スミス前掲書 11) p.27
- 24) スミス前掲書 11) p.62
- 25) スミス前掲書 11) p.64
- 26) スミス前掲書 11) p.65
- 27) スミス前掲書 11) p.62
- 28) 須田勝彦「人間の本質規定—教育学の出発点を探るためのメモ」(所収『教授学の探究』第 21 号 北海道大学大学院教育学研究科・教育方法学研究室編 2004) p.79
- 29) 須田前掲書 28) p.79
- 30) スミス前掲書 11) p.73
- 31) スミス前掲書 11) p.74
- 32) 内田前掲書 4) p.111